



2013年度

慶應義塾大学入学試験問題

理 工 学 部

理 科

- 注 意
1. 氏名と受験番号は、解答用紙（2枚）の所定の欄にそれぞれ記入しなさい。
 2. 解答は、理科（物理）解答用紙（アイボリー色）および理科（化学）解答用紙（白色）の所定の欄に記入しなさい。
 3. 解答用紙の余白および裏面には、何も書いてはいけません。
 4. 問題冊子は12ページからなります。
物理の問題は2ページから4ページにあります。
化学の問題は9ページから11ページにあります。
5～8ページおよび12ページは余白です。
 5. 問題冊子の余白は、計算および下書きに使用してもかまいません。
 6. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。

物 理

1. 以下の文章中の〔ア〕～〔ケ〕に適切な式を記入しなさい。解答に使える物理量は、 R, M, m, g, v_0 のみとする。ただし、〔ウ〕には θ 、〔エ〕には s も使いなさい。〔コ〕には適切なグラフを描きなさい。ただし、グラフ中に値を書き加えなくてもよい。

図1, 2のように、水平で滑らかな床の上に、半径 R の滑らかな半円筒面をもった質量 M の台が静かに置かれている。質量 m の小球を半円筒面の底の位置Aに静かに置く。小球と台は紙面に平行な方向にのみ運動する。円筒の中心をO、任意の時刻における小球の位置をBとし、 $\angle AOB$ を θ とする。反時計回りを θ の増加する向きとし、BがAの右側にあるとき $\theta > 0$ 、左側にあるとき $\theta < 0$ とする。重力加速度の大きさを g とする。

1) まず、図1のように、台が床に固定されている場合を考える。Aに置かれた小球に水平右方向で速さ v_0 の初速度を与える。小球は $\theta = \theta_1$ になるまで半円筒面を上り、その後、半円筒面を下った。このとき $\cos \theta_1 =$ 〔ア〕である。よって、小球が台から飛び出さないための条件は $v_0 \leq$ 〔イ〕である。Bにおいて小球に働く力の円弧に沿う方向の成分 F は、反時計回りを正の向きとして、 θ を使って $F =$ 〔ウ〕と書ける。ここで、 θ_1 が十分小さい場合を考える。このとき $\sin \theta \approx \theta$ と近似できる。小球の円弧に沿ったAからの変位を、反時計回りを正の向きとして s とする。この s を使うと、 $F =$ 〔エ〕と書け、小球は角振動数 $\omega =$ 〔オ〕の単振動を行うことがわかる。

2) 次に、図2のように、台が床の上を運動できる場合を考える。水平方向の速度は右方向を正とする。台が床に対して静止している状態で、Aに置かれた小球に水平右方向で速さ v_0 の初速度を与えると、小球は半円筒面を上り、 $\theta = \theta_2$ のとき小球は台に対して静止した。このとき、台と小球は床に対して速度 $V_2 =$ 〔カ〕で運動しており、 $\cos \theta_2 =$ 〔キ〕である。よって、小球が台から飛び出さないための条件は $v_0 \leq$ 〔ク〕である。その後、小球は半円筒面を下り、Aを通過して半円筒面の反対側を上った。ここで、小球がAを通過したとき、小球は台に対して相対速度 $v_3 =$ 〔ケ〕で運動していた。床に対する台の速度 V が時刻 t とともに変化する様子を、小球がAを4回通過するまでグラフに描くと〔コ〕となる。ただし、Aに置かれた小球に初速度を与えた時刻を $t=0$ とする。

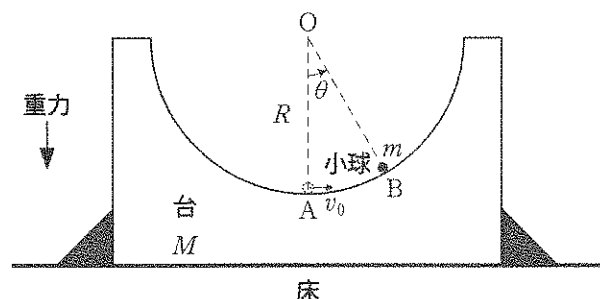


図1

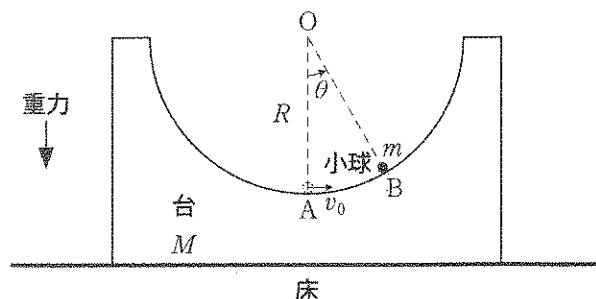


図2

2. 以下の文章中の (ア) ～ (キ) に適切な式を記入しなさい。解答に使える物理量は、 a , R , v , B , t のみとする。ただし、(イ) には Δt も使いなさい。(ク) には適切なグラフを描きなさい。ただし、グラフ中に値を書き加えなくてもよい。

図1のような、3辺の長さが a 、1辺の長さが $2a$ の台形の閉回路がある。各辺には抵抗値 R の細い抵抗が取り付けられている。導線の抵抗は無視できるものとする。この閉回路を、図2のように、紙面内で右方向に一定の速さ v で動かす。閉回路は変形も回転もしないものとする。図2の灰色の領域には、磁束密度の大きさ B の一様な磁場が、紙面に垂直で裏から表に向かう向きに加わっている。閉回路の先端が磁場中に入る時刻を $t=0$ とする。閉回路を流れる電流により作られる磁場の影響は無視できるものとする。

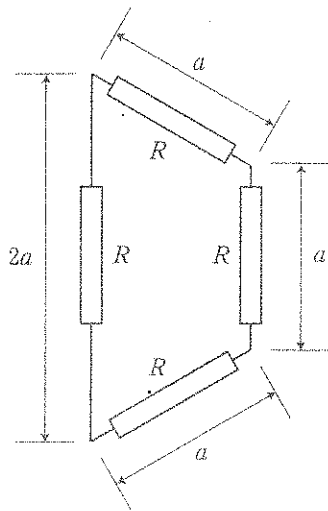


図1

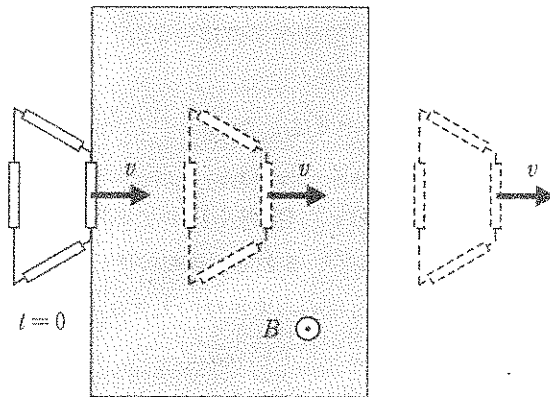


図2

1) 閉回路先端が磁場中に入る時刻から、閉回路全体が磁場中に入る時刻までを考える。時刻 t において、閉回路内の磁場中にある面積 $S(t)$ は、 $S(t) =$ (ア) と表される。時刻 t から $t + \Delta t$ までの間に、閉回路内の磁場中にある面積は、 $S(t + \Delta t) - S(t) =$ (イ) だけ増加する。よって、 Δt を微小時間として (イ) 中の $(\Delta t)^2$ を含んだ項を無視すると、時刻 t において、この閉回路に発生する誘導起電力 $E(t)$ は、閉回路を反時計回りに回る向きを正の向きとして、 $E(t) =$ (ウ) となる。

この誘導起電力により閉回路を流れる電流 $I(t)$ は、閉回路を反時計回りに回る向きを正の向きとして、 $I(t) =$ (エ) となり、この電流により発生する単位時間あたりのジュール熱 $J(t)$ は、 $J(t) =$ (オ) となる。

この電流と磁場により発生するローレンツ力に逆らって、閉回路を右方向に一定の速さ v で動かすために閉回路に加える左右方向の力 $F(t)$ は、右方向を正の向きとして、 $F(t) =$ (カ) であり、その仕事率 $P(t)$ は、 $P(t) =$ (キ) となる。

2) 閉回路先端が磁場中に入る時刻から、閉回路全体が磁場中から出る時刻までを考える。閉回路を右方向に一定の速さ v で動かすために閉回路に加える左右方向の力 $F(t)$ (右方向を正の向きとする) が、時刻 t とともに変化する様子をグラフに描くと (ク) となる。ただし、グラフ中で、 t_1 は閉回路全体が磁場中に入る時刻、 t_2 は閉回路先端が磁場中から出る時刻、 t_3 は閉回路全体が磁場中から出る時刻を表している。

3. 以下の文章中の (ア) ~ (キ) に適切な式を記入しなさい。解答に使える物理量は、 λ , θ , ℓ , f , λ_2 のみとする。ただし、(イ) には k , (ウ) には m も使いなさい。

1) 図1のように、2枚の鏡M1とM2が、紙面に垂直で互いに平行になるように真空中に配置されている。紙面内で、鏡に垂直右向きを x 軸の正の方向、鏡に平行上向きを y 軸の正の方向とする。M1はすべての光を反射するが、M2は一部の光を反射し、残りを透過する。M1には、 y 方向に幅が広く、紙面に垂直方向に長くのびたスリットがある。このスリットを通して、進行方向が紙面に平行な波長 λ の光が、M2上の位置 S_0 に角度 θ で入射する。入射した光は、 S_0 において一部が反射され、残りは透過する。反射された光はM1上の位置 R_0 で反射され、次にM2上の位置 S_1 において一部が反射され、残りは透過する。以後、順に、M2上の位置 $S_2, S_3, \dots, S_N$ から光が透過する。これらの透過光は、回折して広がる。一方、スリットの幅が広く、M1とM2の間隔 ℓ が狭いため、スリットを通過し、M1とM2の間を進む光については、回折による広がりを無視することができる。なお、M1とM2で反射するとき、光の位相は反転する(位相が半波長分ずれる)。すべての透過光の明るさが等しくなるように、M2の光の透過率を調整してある。

S_0 と S_1 の距離を d とすると、 $d =$ (ア) である。また、光が S_0 から S_k ($1 \leq k \leq N$) まで進む経路の長さは (イ) となる。よって、 $S_0, S_1, \dots, S_N$ から x 軸に平行な方向に回折する光がすべて強め合う条件は、 m を正の整数として、 $\lambda =$ (ウ) (条件(1)) である。

条件(1)が成立しているとき、 x 軸に平行な方向以外にも、複数の方向に強め合う光が観測された。これらの強め合う光の方向と x 軸のなす角度の大きさの最小値を ϕ_1 (> 0) とすると、 $\sin \phi_1 =$ (エ) である。次に、光の波長を λ から徐々に短くしていったところ、 x 軸に平行な方向に回折する光は、いったん弱め合うようになり、波長が λ_1 のとき再び強め合うようになった。 $\lambda_1 =$ (オ) である。

2) 図2のように、焦点距離 f の凸レンズをM2から x 軸方向に f 離れた位置に置き、さらに、レンズから f 離れた位置にスクリーンを置く。このとき、 $S_0, S_1, \dots, S_N$ から出た互いに平行な強め合う光は、スクリーン上に明るい点(明点)として像を結ぶ。条件(1)が成立するように、波長 λ の光を角度 θ で S_0 に入射させたところ、スクリーン上に明点が並んだ。 x 軸に平行な方向に回折する光がつくる明点の y 座標を $y = 0$ とする。この明点から最も近い明点までの距離は (カ) であった。次に、光の波長を λ から徐々に長くしていったところ、 $y = 0$ にあった明点は、 y 軸の正の方向に移動した。波長が λ よりわずかに長い λ_2 になったとき、この明点の y 座標は (キ) であった。このように、この光学系は分光器として利用できる。

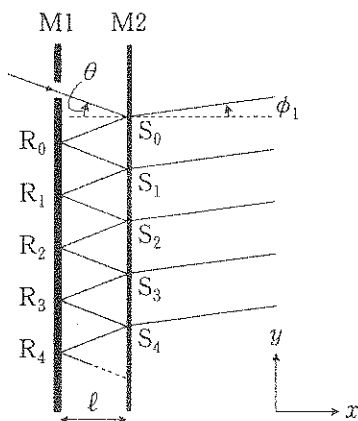


図1

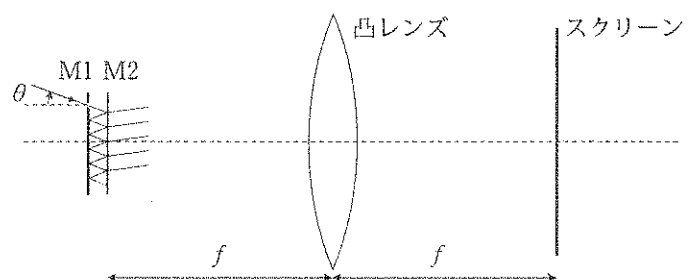


図2